目次に戻る

『平家物語』における物語の変容と和歌の多義性

―「日本文学概論」での実践報告―

山﨑真克

キーワード：日本文学概論・『平家物語』・忠度都落・忠度最期・物語の変容

はじめに

『平家物語』には多様な諸本がみられ、それぞれの諸本の生成過程においては、さまざまな意図により物語が変容をとげている。こうした流動的な物語の様態を捉えることに関連する事項は、以下のように新学習指導要領においても見出せる（傍線は稿者による）。

◎高等学校学習指導要領国語（平成三十年三月告示）「古典探究」

〔思考力、判断力、表現力等〕

・「A　読むこと」に関する指導事項

ウ　必要に応じて書き手の考えや目的、意図を捉えて内容を解釈するとともに、文章の構成や展開、表現の特色について評価すること。

エ　作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察すること。

ク　古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。

・「A　読むこと」の指導事項についての言語活動例

イ　同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。

それでは、教員志望の学生が具体的な実感を伴って物語の変容について把握するためには、どのような工夫が必要なのであろうか。

高等学校教科書に定番教材として掲載される『平家物語』「忠度都落」にみられる平忠度の「さざなみや」詠は、『平家物語』諸本の増補系（読み本系）・語り本系によって物語上の役割が異なることが中村文氏によって指摘されている。[注1] さらに「ゆきくれて」詠がみられる「忠度最期」の場面についても、中村文氏および櫻井陽子氏によって諸本による本文内容の異なりと和歌の関係に関する詳細な検討が施されている。[注2] これらの先学の驥尾に付して、和歌の多義性を利用した物語の変容の状況について整理した上で、教員志望学生を受講生に含む「日本文学概論」において行った実践について報告する。

二　「忠度都落」の「さざなみや」詠

『平家物語』が中学校・高等学校の古典教材として用いられていることについてはさまざまな指摘があり、特に「忠度都落」の場面を取り上げたものとしては、安野博之氏、田中幹子・加藤兼司氏、浜畑圭吾・下西忠・鈴木徳男氏などの論考がみられる。(注3) なかでも安野博之氏は、覚一本をその代表とする語り本系の本文を基礎テクストした「忠度都落」が「美しい師弟愛の物語」「鎮魂の物語」「歌道執心ないしは風流に心を寄せる人物の物語」などさまざまに読まれてきたとし、「その時代の要請により、「忠度都落」は、いかようにも教えることができる便利な教材」として教科書に採択されてきたと述べる。

一方、中村文氏は、『平家物語』において忠度が突出して「歌人」としての扱いを受けているとする従来の見方に対して、「忠度都落」の場面は「武門歌人の優雅さや歌道に執する姿勢を顕彰することのみを目指して描かれてはいない」とする。

・覚一本平家物語巻第七「忠度都落」

…薩摩守宣ひけるは、「年来申し承ッて後、おろかならぬ御事におもひまゐらせ候へども、この二三年は、京都のさわぎ、国々のみだれ、しかしながら当家の身の上の事に候ふ間、疎略を存ぜずといへども、つねにまゐりよる事も候はず。君既に都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はやつき候ひぬ。撰集のあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世のみだれいできて、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の歎きと存ずる候ふ。世しづまり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらむ。これに候ふ巻物のうちに、さりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙ッて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御まもりでこそ候はんずれ」とて、日ごろ読みおかれたる歌どものなかに、秀歌とおぼしきを百余首書きあつめられたる巻物を、今はとてうッたたれける時、これをとッてもたれたりしが、鎧のひきあはせより取りいでて俊成卿に奉る。（中略）その後世しづまッて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありしありさま、いひおきしことの葉、今更おもひいでて哀れなりければ、かの巻物のうちにさりぬべき歌いくらもありけれども、勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、「故郷花」といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、「読人しらず」と入れられける。

さざなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

その身朝敵となりにし上は、子細におよばずといひながら、うらめしかりし事どもなり。(注4)

覚一本の傾向について中村氏は、都落に際して俊成邸を訪ねた忠度が「既に死を宿命づけられた存在」であり、「避けることのできない死を引き受けさせられた者とそれを見送る者との、最終的な交流が描き出されていること」によって「この段が哀感に満ちている」と述べる。

増補系（読み本系）の代表として取り上げる延慶本では、「歌道に対する執着心のあからさまな吐露」として、忠度が俊成に対して自らの詠草を託すことが示される。

・延慶本平家物語第三末「薩摩守道ヨリ返テ俊成卿ニ相給事」

…「世シヅマリ候ナバ、定テ勅撰ノ切終候ワムズラム。身コソカヽル有様ニマカリ成候トモ、ナカラムアトマデモ、此道ニ名ヲカケム事、生前之面目タルベシ。集撰集ノ中ニ、此巻物ノ内ニサルベキ句候ハヾ、思食出シテ、一首入ラレ候ナムヤ。且ハ又念仏ヲモ御訪候ベシ」トテ、鎧ノ引合ヨリ百首ノ巻物ヲ取出シテ、門ヨリ内ヘ投入テ、「忠度今ハ西海

ノ浪ニシヅムトモ、此世ニ思置事候ワズ、サラバ入セ給ヘ」トテ、涙ヲノゴイテ帰ニケリ。俊成卿感涙ヲヲサヘテ内ヘ帰入テ、燈ノ本ニテ彼巻物ヲ見ラレケレバ、秀歌共ノ中ニ、「古京ノ花」ト云題ヲ。

サヾナミヤシガノミヤコハアレニシヲムカシナガラノ山ザクラカナ

「忍恋」ニ。

イカニセムミヤギガハラニツムセリノネノミナケドモシル人ノナキ

其後イクホドモナクテ世シヅマリニケリ。彼ノ集ヲ奏セラレケルニ、忠度此道ニスキテ、道ヨリ帰タリシ志アサカラズ。但シ勅勘ノ人ノ名ヲ入ル、事、ハヾカリアル事ナレバトテ、此二首ヲ「ヨミ人シラズ」トゾ入ラレケル。サコソカワリ行世ニテアラメ、殿上人ナムドノヨマレタル歌ヲ、「読人シラズ」ト被入ケルコソ口惜ケレ。(注5)

覚一本と比較して叙述が簡略な延慶本では、「さざなみや」詠は「いかにせむ」詠(注6)とともに『千載和歌集』への入集の事実を示す根拠としての役割が課せられている。

『千載和歌集』に「さざ浪やしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな」(春上・66)・「故郷花といへる心をよみ侍りける」・よみ人しらず(注7)として入集する当該歌は、忠度集・15にもみられる。その詞書に「為業歌合に、故郷花を」とあることから、仁安元年(一一六六)～治承二年(一一七八)頃に催された『寂念(藤原為業)歌合』での詠作と考えられる。(注8)よってこの「さざなみや」詠は、中村氏が「荒廃した旧都と咲き誇る山桜とを詠じた、転変する人事と変わることのない自然との対比を眼目とする作」と言われるように、本来は「都落」の場面とは関係のない内容であった。

ところが覚一本においては、「平家一門の運命すべてを覆い尽くして表象するかのような象徴性」を持たされることとなる。「さざなみや」詠の「多義性」の利用、すなわち「話柄との間の相互作用によって生じる重層的な情調を最大限に利用することで、哀切な話をよりいっそう濃厚で複雑な味わいを持つ哀切さで彩る」ことを意図した物語の変容を覚一本は行っているのである。

三　「忠度最期」の「ゆきくれて」詠

続いて本節でも、中村氏の論考に従って覚一本・延慶本の本文内容および「ゆきくれて」詠の物語上の役割についての整理を行う。

・覚一本平家物語巻第九「忠度最期」

…六野太が童おくればせに馳せ来たって、打刀をぬき、薩摩守の右のかひなを、ひぢのもとよりふつときりおとす。今はかうとやおもはれけん、「しばしのけ、十念となへん」とて、六野太をつかうで、弓だけばかりなげのけられたり。その後西にむかひ、高声に十念となへ、「光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨」とのたまひもはてねば、六野太うしろよりよって薩摩守の頸をうつ。よい大将軍うッたりとおもひけれども、名をば誰ともしらざりけるに、箙にむすび付けられたる文をといてみれば、「旅宿花」といふ題にて、一首の歌をぞよまれたる。

「ゆきくれて木のしたかげをやどとせば花やこよひのあるじならまし」

忠度」とかかれたりけるにこそ、薩摩守とはしりてンんげれ。太刀のさきにつらぬき、たかくさしあげ、大音声をあげて、「この日ごろ平家の御方にきこえさせ給ひつる薩摩守殿をば、岡部の六野太忠純がうちたてまッたるぞや」と名のりければ、敵もみかたもこれをきいて、「あないとほし、武芸にも歌道にも達者にておはしつる人を、あッたら大将軍を」とて、涙をながし袖をぬらさぬはなかりけり。

「ゆきくれて」詠は、忠度の家集等には見出せないため、実作であるかどうかの確証は得られない。ただ、この歌は花を見るうちに日が暮れてしまった感慨を述べた内容であり、「さざなみや」詠と同様に、一ノ谷の合戦において討たれる際など物語が進行するその場で詠まれたものではない。覚一本においては、忠度を討った六野太が、その首の主が忠度であることを知る契機として、当該歌と「忠度」という署名が機能しているが、それだけではない。中村氏が述べる通り、物語の中に当該歌を置くことで、「敗者となって行き場を失った者の当惑と悲痛な心情がないまぜに表出されたもののように享受でき」るようになり、「平家一門全体の運命を哀切なものとして情緒に訴えるような形で表象する役割」が生じている。

一方、増補系（読み本系）の延慶本では、六野太に討たれる忠度が描かれるものの、「ゆきくれて」詠はみられない。

・延慶本平家物語第五本「薩摩守忠度被討給事」

…六矢田ガ郎等落合テ、打刀ヲ以テ忠度ノ弓手ノ小ガヒナヲカケズ切ヲトス。サレドモ忠度スコシモヒルマズ、メテノカヒナニテ六矢田ヲノセテ、三イロバカリ被投タリ。忠澄ヲキアガリテ、忠度ニ組。ウヘニ乗キテ取テ押テ、「誰人ゾ。名乗給ベシ」ト、「己レニ合テ一度モ名乗ルマジキゾ。己ガ見知ラヌコソ人ナラネ。サリナガラモヨキ敵ゾ。定勧賞ニ預ラムズラムゾ」ト云ケレバ、六矢田ガ郎等落重テ、忠度ノ鎧ノクサズリヲ引上テ是ヲサス。忠澄刀ヲ抜テ指カトミヘケレバ、頸ハ前ニゾ落ニケル。忠澄頸ヲ太刀ノサキニ指貫テ、『『名乗レ』トイヘドモ名乗ラズ。是ハタガ頸ゾ」ト云テ、人ニミスレバ、「アレコソ太政入道ノ末弟、薩摩守忠度ト云シ歌人ノ御首ヨ」ト云ケルニコソ、始テサトモ知タリケレ。忠澄、兵衛佐殿ニ見参ニ入テ、勲功ニ薩摩守ノ年来知行ノ所五ケ所アリケルヲ、忠澄ニ給テケリ。

前述したように、「ゆきくれて」詠が忠度実作である確証が得られないこと、延慶本等にこの歌がみられないことから、「諸本の流伝のうちに増補された」と考えられてきた。しかし櫻井陽子氏は、同じ増補系（読み本系）の長門本・源平盛衰記には存在することから、「忠度の歌は読み本系三本を遡る祖本の段階では存在し、延慶本が省略したと考えても無理はない」と指摘する。

その上で、増補系（読み本系）においては、延慶本では忠度の頸、長門本・源平盛衰記では「ゆきくれて」詠とその署名が証拠となって、「六弥太が恩賞を受けた武勲譚としての性格を有する」とされる。それに対して語り本系の覚一本では、先述したように「忠度追悼の思い」という抒情性が強調された物語の変容が行われているのである。

四　「日本文学概論」での実践

先学の研究成果に基づくここまでの整理をふまえて、「日本文学概論」における実践について報告する。当該科目は、現代文化学部言語文化学科の「専門基礎」に区分される専門科目として一年次後期に設定している。一年次前期の「日本文学入門」を承けて、日本文学に関する基本的な知識を身に付けることを目標としている。それと同時に、中学校・高等学校教諭一種免許状（国語）の取得に向けた「教科に関する科目」「国文学（国文学史を含む）」の一般的・包括的科目に指定されている。受講生は例年百名程度であり、そのうち教員志望の学生は三十～四十名程度含まれる。全十五回の授業のうち、前半八回分を古典文学分野の稿者が、後半を近現代文学分野の教員が担当する。今回の実践は、第八回目「物語の変容―『平家物語』諸本の生成」として行った。

前半八回分の授業配付資料を冊子としてまとめたものを、第一回目授業時

にあらかじめ配付した。今回の資料は、「①『平家物語』の本文系統に関する概説、②平忠度についての説明、③「忠度都落」の場面の和歌の解説、④「忠度最期」の場面の和歌の解説、⑤両場面の延慶本・覚一本の本文」により構成している。

シラバスおよび毎回の授業終了時に、次回の授業範囲に関する資料を読み込む作業を課している。よって、①・②の情報についてはごく簡単な説明に留めた。

次に、③「忠度都落」・④「忠度最期」の場面の内容に入る前に、映像資料を用いて背景となる予備的な情報を提示した。使用したのは、三木紀人氏監修『平家物語人物紀行』第三巻「悲劇の脇役たち」（サン・エデュケーショナル　平成14）である。基本的には語り本系の覚一本に基づく解説・本文朗読であるが、一部増補系（読み本系）の内容にふれる箇所もある。絵巻等の資料やゆかりの地の風景などにより、視覚的に場面をイメージしやすくする効果をねらった。

場面の概要を把握した上で、③・④の解説を参考にしながら、⑤の覚一本・延慶本の本文読解を求める。本文読解用の資料には、原文・現代語訳・語釈が含まれるため、③・④では和歌の解釈そのものよりも、前節までの整理をふまえた延慶本・覚一本での位置付けの違いに焦点をあてて解説を行った。資料に掲載した③・④の解説と、読解後に課したミニレポートの課題、およびそれぞれの課題に対する受講生のコメントの一部を以下に示す。

「忠度都落」の場面の和歌―勅撰集に「よみ人しらず」として入集

・千載和歌集巻第一　春歌上

故郷花といへる心をよみ侍りける　よみ人しらず

66　さざ浪や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山ざくらかな

（さざ波の志賀の古い都は荒れはててしまったが、長等の山の山桜は昔のままに美しく咲いているよ。）…〔忠度集・15〕

◎変わってしまった人間（荒廃した古い都）と、変わらない自然（山桜）との対比を詠む歌

→延慶本…『千載和歌集』に入集した事実を伝えるのみ

→覚一本…都を落ち死を予感させる者の哀感を示し、滅び行く平家の運命を象徴する

◎『平家物語』「忠度都落」の場面について、延慶本と覚一本とを比較して、それぞれの伝本の著作意図について考察した内容を分かりやすくまとめなさい。

・延慶本は、俊成が警戒して門より内に入れず歌集を手渡しできないなど、忠度が敵側であることを強調しており、また客観的に書かれている。覚一本は、家の中に入れ歌集も手渡しできるなどし、別れの時に俊成が惜しんでいることもあり、悲しい感じが漂っている。忠度側に寄り添っている。

・覚一本では平家の命運が尽きた様子を同情的な人の動きや落人に対する人の反応を通して印象づけようとしているように読み取れる。延慶本はたんたんと事実のみが書かれており、実際のあったことの記録という意思が強く出ているように思えた。覚一本は感情移入や引き込みを行いやすい物語的要素を多く含んでいる。

続いて④「忠度最期」の場面の和歌の解説について示す。前述した櫻井陽子氏の論考に記されていた展開およびそれを示す番号・記号に基づき、延慶本・覚一本を上下に対照させて対応関係が把握しやすくなるように配置した。

「忠度最期」の場面の和歌 ― 延慶本と覚一本の比較

・延慶本平家物語第五本（巻九）「薩摩守忠度被討給事」

① 忠度が一騎で浜辺を落ちていく。
② 岡部六弥太忠澄が追いつき、忠度にお歯黒があることから、平家方の大将と確信。
③ 組み打ちとなり、忠度が優勢となる。
④ 六弥太の郎等が忠度の片腕を切り落とす。
⑤ 忠度は残った片腕で六弥太を投げ飛ばす。
⑥ 忠度は六弥太に組み伏せられる。
⑦ 名乗りを求められるが、忠度は応じない。
⑧ 六弥太の郎等が忠度を討つ。
⑨ 六弥太は忠度の首を太刀の先に貫く。
A 首を人に見せると、忠度という歌人だと教えられる（和歌はなし）。
※長門本…箙（矢を入れて腰に付ける道具）に差した巻物に和歌と名前が書かれてあり、忠度の名が明かされる。
⑩ 六弥太は褒美に忠度の領地をもらう。

◎六弥太に焦点をあてた、六弥太の手柄話

※首（延慶本）・巻物（長門本）
↑
六弥太のあげた手柄の証拠
和歌の内容ではなく、名前が重要

・覚一本平家物語巻第九「忠度最期」

① 忠度が百騎に囲まれ浜辺を落ちていく。
② 岡部六弥太忠澄が追いつき、忠度にお歯黒があることから、平家方の大将と確信。
a 忠度に従っていた百騎が逃げ去る。
③ 組み打ちとなり、忠度が優勢となる。
④ 六弥太の郎等が忠度の片腕を切り落とす。
⑤ 忠度は残った片腕で六弥太を投げ飛ばす。
b 忠度は西に向かって念仏を唱える。
⑧ 六弥太が忠度を討つ。
A 箙（矢を入れて腰に付ける道具）に結びつけた文に書かれていた和歌と名前から、忠度の名が明かされる。
⑨ 六弥太は忠度の首を太刀の先に貫く。
c 六弥太は自らの功績と名を名乗る。
d 敵も味方も、忠度の死を悼む。

◎忠度に焦点をあてた、忠度追悼の話

※旅先での花と人との語らいを詠む歌
↑
忠度の人生や、滅亡する平家の運命を象徴する役割を果たす

◎『平家物語』「忠度最期」の場面について、延慶本と覚一本とを比較したまとめを参考にしながら『平家物語』原文を読んで、物語の変容という点について各自が改めて気付いたこと、考えたことを自由に述べなさい。

・変容という点では、好き嫌いで分かれているのではないか。源氏好きは延慶本で、忠度を討ち取り六弥太は褒美をもらっている。一方、平氏好きは忠度を最後まで美しく描いている点から、変容は時代の好みや、社会背景との密接な関係があるのではないか。

・物語の変容は、基本的な流れは変えずに重要なポイントのみを変えている。重要なポイントが変わることによって、物語の中心となるものも変わる。（中略）一部が変わるだけで印象が大きく変わる。これは、伝本を書いた著者が自分が読者に伝えたい部分を強調するため故意に変えているのだろう。伝本の変容は何かしらの意図があって行われていることが分かった。

おわりに

教員志望の学生が具体的な実感を伴って物語の変容について把握できることを目指して、『平家物語』「忠度都落」および「忠度最期」にみられる平忠度の和歌の多義性を利用した変容の事例を取り上げた「日本文学概論」における実践について報告した。中村文氏および櫻井陽子氏ほか先学の研究成果に基いた整理を行い、資料として提示する情報の工夫を行ったことで、受講生の理解の面では一定の効果をあげることができた。

一方で授業デザインの面ではさらに工夫の余地がある。今回は映像資料による場面理解を行った後、事前配付資料として各場面の和歌の役割に関する解説を示した上で、原文読解を行ったが、受講生自身が主体的に課題発見・問題解決を図る能力を向上させるためには、別の方法が必要である。例えば、各場面での覚一本・延慶本それぞれの展開、和歌の内容および役割などを個

別の課題として切り分け、ジグソー法による協同学習を行うことで、さらに深い学びにつなげることが可能となる。

また、今回取り上げた『平家物語』「忠度都落」「忠度最期」の場面をさらに受容・変容させたものとして、謡曲「忠度」「俊成忠度」、浄瑠璃『薩摩守忠度』などがある。金沢節子氏・岡﨑真紀子氏による『平家物語』と歌舞伎「俊寛」を用いた教材化に関する研究[注9]などを参考にしつつ、発展課題として設定する方法についても検討を続ける必要がある。

教員養成においては、教科の内容に関する知識を身に付けることももちろん大事であるが、それだけでは不十分である。古典を読み、現代で生きる上での課題と結びつけて、自身の問題として考え続ける姿勢を持つことこそが必要である。物語の変容というテーマは、現代の文学を考える上でも共通性を有するものであり、学生にとって実感をもって捉えやすい。人間理解の基盤として、古典は有意義な思索へと導く魅力を有している。

教員を目指す大学生には、自分が何のために古典を学ぶのかを自覚した上で、中・高校生に対してその思いを提示する勇気、粘り強い姿勢を持ってもらいたい。それは、大学教員の場合であっても同様である。

繰り返すが、知識を身に付けることは大事である。古典文法・語彙・作者や作品の成立年代などの文学的知識によって、作品の理解が深まることも充分にありうる。だが、教員養成の現場において、現時点の学生に対して知識の不足のみを自覚させるだけでは先へは進めない。自らが学ぶ姿勢、古典への接近方法を再認識するような学びへの動機づけを行わない限り、意欲ある学びには結びつかないのである。大学教員の立場から、日々の実践を通したより一層の工夫を重ねたい。

注

（1）中村文「平家物語と和歌――平家都落の諸段をめぐって――」（山下宏明編『平家物語　受容と変容　あなたが読む平家物語4』有精堂　平成5・10）。以下、本稿での中村氏の論考の引用はこれに拠る。

（2）櫻井陽子「忠度辞世の和歌「行き暮れて」再考――平家物語の本文の再検討から――」（『国語と国文学』83―12　平成18・12、『『平家物語』本文考』〈汲古書院　平成25・2〉所収）。以下、本稿での櫻井氏の論考の引用はこれに拠る。

（3）安野博之「教科書で『平家物語』はどう読まれてきたか――「忠度都落」を例に――」（『芸文研究』95　平成20・12）、田中幹子・加藤兼司「『平家物語』の高校古典教材としての可能性（上）――古典と古典B」（『比較文化論叢』24　平成22・3）、浜畑圭吾・下西忠・鈴木徳男「後期中等教育における国語教材の研究（1）―『平家物語』「忠度の都落ち」の理解を深める視点から」（『高野山大学論叢』50　平成27・2）。

（4）覚一本の引用は、大津雄一・平藤幸編『平家物語　覚一本　全』（武蔵野書院　平成25・4）に拠る。

（5）延慶本の引用は、北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』本文篇下（勉誠出版　平成2・6）に拠る。

（6）当該歌は『千載和歌集』に「いかにせむみかきがはらにつむせりのねにのみなけどしる人のなき」（恋一・668・「題しらず」・よみびとしらず）として入集するが、『治承三十六人歌合』には「いかにせん宮城の原に摘む芹のねにのみなけど知る人ぞなき」（四番左・64・「恋」）が平経盛歌として掲載される。

（7）以下、和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。

（8）萩谷朴『平安朝歌合大成　増補新訂』第四巻（同朋舎出版　平成8・7）。

（9）金沢節子・岡﨑真紀子「中学校国語科における『平家物語』発展教材「俊寛」の可能性」（奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』別冊　平成29・10）